脳波室からの緊急報告の有用性

◎津藤 有子[1)]、若杉 志穂[1)]、市川 朋亮[1)]、福野 よしみ[1)]、杉山 嘉史[1)]、廣瀬 春香[1)]
公立大学法人 横浜市立大学附属 市民総合医療センター[1)]

【はじめに】当院生理機能検査室では ISO 15189（国際標準化機構 International Organization for Standardization）取得参加準備を機に、臨床への緊急報告波形を定めている。脳波室の緊急報告波形は判読医（精神科）、神経内科、小児神経科など臨床の意見を取り入れ決定した。また、それらに該当しなくとも前回の脳波所見と大きく変化のある場合や、発作が頻繁にある場合なども主治医に報告を行っている。今回、脳波室からの緊急報告の取り組みと、緊急報告を行ったことで早期治療介入することが出来た症例について報告する。

【対象と集計期間】2015 年 4 月～2021 年 10 月までに実施した脳波検査 9952 例のうち、緊急報告を行った脳波記録 126 例（病棟で実施したポータブル脳波検査 54 例、検査室で実施した脳波検査 72 件）

【緊急報告波形】・記録中の強直間代発作・初診時の hypsarrhythmia（類似波形含む）・初診時 re-build up ・非けいれん性てんかん重積など

【報告した診療科】小児総合医療センター 33 例、脳神経内科 28 例、高度救命救急センター 26 例、心臓血管センター 17 例、精神医療センター 14 例、脳神経外科 3 例、その他の診療科 5 例

【まとめ】脳波室からの緊急報告は、患者への早期治療介入を可能とし、神経学的予後改善に貢献する。また、リアルタイムで医師に報告できる体制を整えることは、チーム医療における臨床検査の有用性を向上させるものと考える。

連絡先：045-261-5656 内線 2735
横浜市立大学附属市民総合医療センター　津藤　有子